

令和 2 年度病虫害発生予察予報第 3 号（6 月）

令和 2 年 6 月 4 日
高知県病虫害防除所

《予報の概要》

作 物 名	病 害 虫 名	予想発生量※
水稻（早期稲）	いもち病 ツマグロヨコバイ セジロウンカ ヒメトビウンカ	平年並(県下全域) <u>多(中央、西)</u> 、やや少(東、中西) 平年並(県下全域) <u>多(中央、西)</u> 、やや少(東、中西)
水稻（普通期稲）	いもち病 イネミズゾウムシ スクミリンゴガイ	平年並(県下全域) <u>やや多(県下全域)</u> <u>多(県下全域)</u>
かんきつ類(温州みかん)	そうか病 黒点病 ミカンハダニ カメムシ類	<u>やや多(中央)</u> <u>多(中央)</u> <u>多(中央)</u> 少(中央)
かんきつ類（中晩柑類）	そうか病 黒点病 かいよう病 ミカンハダニ カメムシ類	<u>多(東)</u> 、少(中央、中西、西) <u>やや多(中西)</u> 、平年並(中央)、やや少(東、西) <u>多(中西)</u> 、少(東、中央、西) <u>多(東、中央)</u> 、 <u>やや多(中西)</u> 、少(西) 平年並(東、中西)、少(中央、西)

※ （ ）内の表記 東：県東部、中央：県中央部、中西：県中西部、西：県西部
県 東 部：安芸市、室戸市および安芸郡の町村
県中央部：高知市、南国市、香美市、香南市、長岡郡・土佐郡の町村、
吾川郡いの町および高岡郡日高村
県中西部：土佐市、須崎市、高岡郡(日高村を除く) 町村および吾川郡仁淀川町
県 西 部：四万十市、宿毛市、土佐清水市および幡多郡の町村

I 気象予報（高松地方気象台 5 月 28 日発表）

5 月 30 日から 6 月 29 日までの天候見通し

<特に注意を要する事項>

期間の前半は気温がかなり高くなる可能性があります。

<予想される向こう 1 か月の天候>

平年に比べ、曇りや雨の日が多いでしょう。

向こう 1 ヶ月の平均気温は、高い確率が 70% です。降水量は、平年並または多い確率ともに 40% です。日照時間は、平年並または少ない確率ともに 40% です。

週別の気温は、1 週目は、高い確率 70% です。2 週目は、高い確率 60% です。

3 ～ 4 週目は、高い確率 50% です。

<向こう 1 か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率（%）>

期間	対象地域	要素	低い(少ない)		平年並	高い(多い)
1 ヶ月	四国地方	気温	10	20	70	
		降水量	20		40	40
		日照時間	40		40	20

<気温経過の各階級の確率（%）>

期間	対象地域	低い		平年並	高い
1 週目	四国地方	10	20	70	
2 週目		10	30	60	
3 ～ 4 週目		20	30	50	

<予報の対象期間>

1 ヶ月：5 月 30 日（土）～ 6 月 29 日（月）

1 週目：5 月 30 日（土）～ 6 月 5 日（金）

2 週目：6 月 6 日（土）～ 6 月 12 日（金）

3 ～ 4 週目：6 月 13 日（土）～ 6 月 26 日（金）

II 病虫害発生予想

1 早期稲の病虫害

1) いもち病（葉いもち）

発生量：平年並（県下全域）

根 拠

(1) 5 月の調査では、各地域ともに発生は確認されていないが、6 月は平年よりも曇雨天の日が多く、気温は高めで、本病の発病や病勢進展に好適な条件となることが予想されている。

(2) BLASTAM（葉いもち発生予測システム）では、5 月 11 日と 17 日に県西部、5 月 27 日に県東部、中央部、西部、5 月 31 日と 6 月 1 日に県中央部と西部で感染好適日が確認されている（BLASTAM による葉いもち発生予測判定状況は病虫害防除所 HP を参照）。

対 策

- (1) 気象や発生状況に注意し、進行型病斑を認めたら速やかに薬剤防除を行う。
- (2) QoI剤耐性菌発生を防止するため、これらの剤の使用回数は作期を通じて1回とする。
- (3) 窒素過多は発病を助長するので、穂肥等の施用は生育状況を見ながら適切に行う。

2) ツマグロヨコバイ

発生量：多（中央部、西部）、やや少（東部、中西部）

根 拠

- (1) 5月の調査では、県中央部と西部で発生が見られ、発生面積は県中央部で平年よりも発生が多く、西部でやや多かった。
- (2) 6月の気温は、平年よりも高めと予想されているため、既発ほ場を中心に発生が増加すると考えられる。

対 策

- (1) 近年、本虫の媒介する萎縮病の発生はほとんどなく、低密度時は薬剤散布は必要ないが、出穂期から登熟期にかけて密度が高くなると、実入りが悪くなることがあるので、その場合は他の病害虫とあわせて防除を行う。

3) セジロウンカ

発生量：平年並（県下全域）

根 拠

- (1) 5月の調査では、発生は確認されていないが、梅雨入り後、平年並に飛来すると考えられる。

対 策

- (1) セジロウンカは、トビイロウンカ、コブノメイガ同様、中国大陸等から飛来する害虫であるため、ほ場内での発生に注意する。多飛来等で、成虫数が株当たり5頭以上になったときは薬剤防除を行う。

4) ヒメトビウンカ

発生量：多（中央部、西部）、やや少（東部、中西部）

根 拠

- (1) 5月の調査では、県中央部と西部で発生が確認され、発生面積は両地域ともに平年よりも多かった。
- (2) 6月の気温は、平年よりも高めと予想されているため、既発ほ場を中心に発生が増加すると考えられる。

対 策

- (1) 本県では、本虫の媒介する縞葉枯病がほとんど発生していないため本虫を対象にした薬剤散布の必要性は低いが、発生が多い場合は他の病害虫と同時防除を行う。

2 普通期稲の病害虫

1) いもち病（葉いもち）

発生量：平年並（県下全域）

根 拠

- (1) 6月は平年よりも曇雨天の日が多く、気温は高めで、本病の発病や病勢進展に好適な条件となることが予想されている。
- (2) BLASTAM（葉いもち発生予測システム）では、5月27日に県東部、中央部、西部で感染好適日が確認されている（BLASTAMによる葉いもち発生予測判定状況は病害虫防除所HPを参照）。

対 策

- (1) 気象や発生状況に注意し、進行型病斑を認めたら速やかに薬剤防除を行う。
- (2) QoI剤耐性菌発生を防止するため、これらの剤の使用回数は作期を通じて1回とする。
- (3) 窒素過多は発病を助長するので、穂肥等の施用は生育状況を見ながら適切に行う。

2) イネミズゾウムシ

発生量：やや多（県下全域）

根 拠

- (1) 暖冬であったことから、越冬量は多いと考えられる。6月の気温は平年よりも高めと予想されており、移植後すぐに本田への侵入が見られるものと考えられる。

対 策

- (1) 箱処理剤を施用していないほ場で、発生が多い場合は本田防除を行う。

3) スクミリンゴガイ

発生量：多（県下全域）

根 拠

- (1) 暖冬であったことから、冬期の死亡率は低く、既発ほ場での越冬量は多いと考えられる。
- (2) 5月の早期稲の巡回調査では、県下全域の発生面積が平年の約2倍と多く、発生程度も高かった。
- (3) 6月の気温は高めと予想されているため、移植後すぐに活動が活発になると考えられる。

対 策

- (1) 発生水田では田植後2～3週間はできるだけ浅水管理を行うとともに、高密度の場合は薬剤防除を行う。

3 カンキツ（温州みかん）の病害虫

1) そうか病

発生量：やや多（中央部）

根 拠

- (1) 5月の調査では、発病程度の高いほ場は見られなかったものの、発生面積は平年並であった。
- (2) 6月は曇雨天の日が多く、降水量は平年並または多いと予想されていることから、発生は増加すると考えられる。

対 策

- (1) 幼木や発生の多い園地では黒点病との防除を兼ねて、予防的な薬剤散布により感染を防ぐ。また、防風垣などの整枝を行い、園地の通風をよくする。

2) 黒点病

発生量：多（中央部）

根 拠

- (1) 5月の調査では、発病程度の高いほ場は見られなかったものの、発生面積は平年よりも多かった。
- (2) 6月は曇雨天の日が多く、降水量は平年並または多いと予想されていることから、発生は増加すると考えられる。

対 策

- (1) 密植園での間伐、老木の更新、防風林の整備等により、枯枝の発生ができるだけ少なくなるように管理する。
- (2) 前回の防除から25日以上経過するか、累積雨量が250mmを超えると薬剤散布を行う。

3) ミカンハダニ

発生量：多（中央部）

根 拠

- (1) 5月の調査では、発生程度の高いほ場は見られなかったものの、発生面積は平年よりも多かった。
- (2) 6月の気温は平年よりも高めと予想されているため、既発ほ場を中心に発生が増加すると考えられる。

対 策

- (1) 薬剤抵抗性発達を回避するため、異なった系統の薬剤によるローテーション防除を心がける。

4) カメムシ類

発生量：少（中央部）

根 拠

- (1) 5月の調査では、ほ場での発生が見られなかった。
- (2) 5月のフェロモントラップへの誘殺数は、中央部では平年よりもやや少なかった。

対 策

- (1) 果樹園周辺の雑木林から飛来してくるので、ほ場内をよく観察して、飛来を確認したら防除を行う。

4 カンキツ（中晩柑類）の病害虫

1) そうか病

発生量：多（東部）、少（中央部、中西部、西部）

根 拠

- (1) 5月の調査では、県東部でポンカンを中心に発生が見られ、発生面積は平年より多かったが、その他の地域では発生は見られなかった。
- (2) 6月は曇雨天の日が多く、降水量は平年並または多いと予想されていることから、既発ほ場を中心に発生は増加すると考えられる。

対 策

- (1) 幼木や発生の多い園地では黒点病との防除を兼ねて、予防的な薬剤散布により感染を防ぐ。また、防風垣などの整枝を行い、園地の通風をよくする。

2) 黒点病

発生量：やや多（中西部）、平年並（中央部）、やや少（東部、西部）

根 拠

- (1) 5月の調査では、県中央部と中西部で発生が見られ、発生面積は中西部で平年並、中央部ではやや少なかった。
- (2) 6月は曇雨天の日が多く、降水量は平年並または多いと予想されていることから、既発ほ場を中心に発生は増加し、その他のほ場でも発生が見られ始めると考えられる。

対 策

- (1) 密植園での間伐、老木の更新、防風林の整備等により、枯枝の発生ができるだけ少なくなるように管理する。
- (2) 前回の防除から25日以上経過するか、累積雨量が250mmを超えると薬剤散布を行う。

3) かいよう病

発生量：多（中西部）、少（東部、中央部、西部）

根 拠

- (1) 5月の調査では、県中西部のみで発生が見られ、発生面積は平年よりも多く、発病程度も高かった。
- (2) 6月は曇雨天の日が多く、降水量は平年並または多いと予想されていることから、既発ほ場を中心に発生が増加し、その他のほ場でも発生が見られ始めると考えられる。

対 策

- (1) 銅剤等の散布による予防に努めるとともに、発病がみられる夏秋梢は剪定、除去する。

4) ミカンハダニ

発生量：多（東部、中央部）、やや多（中西部）、少（西部）

根 拠

- (1) 5月の調査では、県東部、中央部、中西部で発生が見られ、発生面積は東部と中央部で平年よりも多く、中西部で平年並であった。
- (2) 6月の気温は平年よりも高めと予想されているため、既発ほ場を中心に発生が増加すると考えられる。

対 策

- (1) 薬剤抵抗性発達を回避するため、異なった系統の薬剤によるローテーション防除を心がける。

5) カメムシ類

発生量：平年並（東部、中西部）、少（中央部、西部）

根 拠

- (1) 5月の調査では、県下全域では場での発生が見られなかった。
- (2) 5月のフェロモントラップへの誘殺数は、県東部と中西部で平年よりも多く、中央部でやや少なく、西部で少なかった。

対 策

- (1) 果樹園周辺の雑木林から飛来してくるので、ほ場内をよく観察して、飛来を確認したら防除を行う。

農作物の病虫害防除のための情報です。お気軽にご利用ください。

病虫害防除所ホームページ（こうち農業ネット）

- ①病虫害発生予察月報、病虫害発生予察予報
- ②病虫害発生予察注意報、病虫害発生予察警報、病虫害発生予察特殊報
- ③病虫害発生予察技術資料
- ④新しく問題となっている病虫害 etc.